
ポケモンベースボール

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンベースボール

【Nコード】

N1742W

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

学校で明後日からの連休に何をするか話していると、不良のニューラが話しかけてきた。「もしよかったら野球をやらないか？」と言われ、ワニノコとヒノアラシはその誘いに乗り野球に挑戦することにした。ポケモンがトレーナーになる異色小説シリーズ短編。

(前書き)

ワニノコ達の旅に登場するキャラクターが登場する小説です。野球に関する小説です。ある程度の野球の知識がいるかもしれませんが、わからない方でも一応、読めるかと思えます

ワニノコたちが住んでいる町セントタウン。セントタウンにある学校にワニノコたちは通っていた

ある日の学校の休憩時間。明後日から連休という時期のときだった

「なあ、ヒノアラシ。明後日からの連休はなににする？」

「僕は特に。バトルの練習でもやる？」

「せっかくの休みだもんな。なにか別のことをしたいな」

「じゃあ、どうしようか？」

そういつているとワニノコたちのところに誰かが寄ってきた

「だったら、野球でもやらねえか？」

そういつてきたのはクラスに一人だけの不良であるニューラだった

「野球？」

「そうだ。連休に試合があるんだが人数が足りないんだ」

「僕は野球なんてやったことないよ」

「俺もルールぐらいしか知らないぜ」

「それでもいい。やるのか？ やらないのか？」

「俺はやってもいいぜ。ヒノアラシはどうする？」

「僕もやるだけやってみる」

「よし、決まりだな。じゃあ、明後日の連休の始まりに町外れの草原で試合があるからな」

「わかった」

「それじゃあな。遅れるんじゃないぞ」

そういうとニューラは教室を出て行ってしまった

「野球か。少し練習でもするか？」

「そうだね。僕はルールもあんまり知らないし」

「じゃあ、今日はいつものところで野球の練習だな」

「うん」

こうしてワニノコたちはこの日の放課後に、いつもバトルの練習をしている場所で野球の練習をした

だいたいルールを知っているワニノコがヒノアラシにルールを教えながら練習をしたのである

次の日の放課後も野球の練習をし連休初めの試合の準備をするのだ

った

そして、連休初日

ワニノコたちはニューラが言っていた町外れの草原に向かった

草原といっても荒地と草原の境目で、内野が荒地。外野が草原だった

そして、一塁側ベンチにニューラがいた

「きたか」

「よ、ニューラ」

「こいつがワニノコとヒノアラシか」

そういつてきたのは後ろにいたワンリキーだった

「そうだ。こいつはワンリキー。チームのエースだ」

「よろしくな、ワニノコとヒノアラシ」

「よろしく」

「僕たちはどこのポジションにつくの？」

「ワニノコはライト。ヒノアラシはレフトを頼む」

「わかった」

「よし、じゃあ、他のメンバーも紹介してやる」

ニューラはそう言うのと裏で練習をしていたメンバーたちを連れてきた

「こいつがキャッチャーのサイドンだ」

「よろしく」

「こいつがファーストのガルーラだ」

「よろしく」

「こいつはセカンドのオオタチ」

「よろしく」

「こいつがショートのマッスグマ」

「よろしく」

「で、こいつがセンターのトロピウスだ」

「よろしくな」

「俺はワニノコ。よろしく」

「僕はヒノアラシ。よろしくね」

「試合はそろそろだから準備をしておけよ」

ニューラがそう言うのと全員どこかに行ってしまった

ベンチに取り残されたのはワニノコとヒノアラシ、ニューラだけだった

「ところでお前ら。ルールは勉強したのか？」

「まあ一応」

「そうか。じゃあ、今回の特別ルールはほのおポケモンの使用だ」

特別ルールとはこの世界の野球に共通してあるルールで、自分の手持ちポケモンを使うことができるルール。各試合ごとに一種類のタイプが選ばれ、その選ばれたタイプのポケモンのみがポケモンを使用することができるルールである

「じゃあ、僕のリザードンは使えるんだね」

「そう言うことになるな。ただし、一回しか使えないからむやみに使うんじゃないぞ」

「わかってるよ」

「ところで相手は誰なんだ？」

「相手は俺たちと同じレベルのチームのメタルズっていうチームではがねタイプのポケモンが勢ぞろいしているチームだ」

「わかった」

「じゃあ、俺は準備をするからな」

そういうとニューラはベンチ裏に行った

それから数分後。試合が始まった

先攻はワニノコたちのブレイズだった

ブレイズの打順は一番、ガルーラ。二番、トロピウス。三番、サード、ニューラ。四番、ワンリキー。五番、サイドン。六番、ワニノコ。七番、ヒノアラシ。八番、オオタチ。九番、マッスグマだった

一方のメタルズの打順は一番、サードハッサム。二番、ファーストクチート。三番、ピッチャーメタング。四番、キャッチャーボスゴドラ。五番、ショートフォレトス。六番、セカンドコドラ。七番、センターレアコイル。八番、レフトコイル。九番、ライトエアームドだった

一回の表。ブレイズの攻撃

「行くぜ！」

ピッチャーのメタングはストレート中心で変化球はあまり使わない投球だった。そのストレートはスピードが速く、全然バットに当たらなかった

そのため、一回表のブレイズの攻撃は三者凡退に終わった

その裏のメタルズの攻撃

ワンリキーの投球もストレート中心の投球だったが変化球も時々使う投球だった

ワンリキーの早いストレートと切れのいい変化球でメタルズも三者凡退に終わった

二回の表のブレイズの攻撃。バッターは四番のワンリキーからだった

メタングは相変わらずストレートしか投げてこなかった

そうとわかっていながらもなかなかタイミングが合わずワンリキーも三振をしてしまった

その後のサイドンも三振。そして、ワニノコも三振だった

二回の裏のメタルズの攻撃も三者凡退に終わってしまった

この試合は投手戦となった。まったく、タイミングが合わないのだ

そんな中の八回表のブレイズの攻撃だった

「さあこい！」

打順は気合を入れまくっているワニノコだった

しかし、その気合もむなしくツーストライクノーボールとなって追い込まれてしまった

「コレで終わりだ！」

メタングは素晴らしいながらボールを投げた

投げられたボールはストレートだった

「当たれ！」

ワニノコは思いっきりバットを振った

すると、カキンといういい音が響き渡った

「なに！」

メタングはその音を聞き驚いた

ボールはレフト線に飛んでいった。長打コースである

「よっしゃ！」

ワニノコはガッツポーズをとりながら一塁へと向かった。一塁に着いたときまだレフトのコイルがボールに追いついていなかったため、二塁にも向かった

二塁に着いたときにはコイルはボールを拾っていたため、三塁に行くことはできなかった

「ナイスヒットだ！　ワニノコ！」

ベンチからそういう声が聞こえてきた

ノーアウト二塁。ブレイズにとっては絶好のチャンスである

だが、下位打線だったため三人とも三振だったため、このチャンスはなくなってしまった

八回裏のメタルズの攻撃。打順は一番のハサツムからだった

そのハサツムはワンリキーの変化球を狙っていたのだろう。ワンリキーのカーブをうまく捕らえセンターに飛ばした

二番のクチートはストレートで押し切り三振。次のメタングには八回でスピードが衰えてきたストレートをライトに打たれた。そして、四番のボスゴドラは敬遠をしたのである

こうして、ワンアウト満塁という状況になりメタルズにとって絶好のチャンスとなった

そして、バッターは五番のフォレトスである

「フォレトス頼むぜ！」

メタルズのベンチからそう言う声が響き渡った

しかし、フォレトスはワンリキーのストレートと変化球に惑わされ三振してしまった

次の六番のコドラはカーブを何とか拾ったが平凡なサードフライに終わった

こうして、メタルズもチャンスをいかせずこの回を終えてしまったのである

九回表。ブレイズの攻撃は一番からのこう打順だった

九回となればさすがのメタングのストレートのスピードも落ちてきていたためガルーラはなんとかライト線に飛ばしヒットとなった

二番のトロピウスは最後にメタングが使った変化球によって三振

三番のニューラはスピードのなくなったストレートをレフト線に飛ばし、ツーベースヒット。ガルーラは三塁で止まった

そして、期待のかかった四番のワンリキーは敬遠され、一死満塁でブレイズのチャンス。まさに、ピンチの後にチャンスありとはこのことであろう

五番のサイドンは内野の上空に打ち上げてしまい打ち取られてしまった

こうして、二死満塁となったのである

そして、六番はワニノコであった。ワニノコは右バッターボックスに入っている

「ワニノコか……。さっきは打たれちゃったからな。今回はきっちり抑えさせてもらうぜ」

メタングがそうつぶやいた

「さあ、こーい」

ワニノコがそういった

一球目は内角低めのストレートが入ってきたが見送りストライク

二球目は内角高めにストレートが入ってきた。ワニノコはバットを振ったが当たらなかった

（くっ、まずいな）

ワニノコはそう考えた

「コレでとどめだ！」

メタングは思いっきり投げてきた。球はストレートで外角低めに入ってきた。コースはストライクである

「あたれ！！」

ワニノコは思いっきりバットを振った

すると、カキーンという音がグラウンドに響き渡った

ボールは高く上がっているが飛距離がある。このままいけばホームランになりそうな球である

しかし、飛んでいった方向はセンター。センターにホームランをす
るということは並大抵の力ではできない

「レアコイル！ 取るんだ！」

メタングが大きな声で叫んだ

レアコイルはでんじはをボールに当て落とそうとしているがなかなかでんじはが当たらない

すると、でんじはが少し当たったのかボールの勢いが少しなくなった

だが、ボールはまだ入りそうな勢いである

「そのまま入れ！」

「レアコイル落とせ！ 落とすんだ！」

ワニノコとメタングは必死になってボールの行方を追う

そして、ついにボールは落ちたのである……。ホームランエリアに

「やったぜ！」

それを見たワニノコはガッツポーズをしながらダイヤモンドを回った

そして、コレで四対〇と点差を開いたのである

ホームランを打たれたメタングは悔しそうな顔をしていた

だが、次のヒノアラシはストレートで抑えきった

こうして、四対〇という大差で九回裏を迎えるのだった

九回裏のメタルズの攻撃は下位打線である七番のレアコイルからだ

った

しかし、下位打線といっても疲れてストレートのスピードと変化球のキレが落ちてきているワンリキーの球を打つことはできた

七番のレアコイルはサードフライ。八番のコイルはファーストフライ。そして、注目の九番のエアームド

（こいつを抑えれば俺たちの勝ちだ）

ワンリキーはそう考えた

しかし、エアームドにはキレのなくなってきたいる変化球を打たれ
二死一塁

そして、上位打線に戻ったメタルズの一番手ハッサムもピッチャー
返しで出塁して、二死一二塁

次のクチートはツースリーと追い込んだがあまいところに入ったストレートを打たれ出塁された。そして、二塁ランナーが戻ってきて
四対一となった

そして、二死二三塁となったのである

次のバッターのメタングも内野安打で出塁してしまったのである

こうして、ブレイズと同じ二死満塁という状況を生んでしまったのである。しかし、違う点が一つあった。それは、一発打たれたら逆転され逆転負けしてしまうということであるのである

そして、次のバッターはメタルズの四番のボスゴドラである

「さあ、逆転だぜ」

「そんなことはさせるかよ」

ワンリキーは力強く言った。しかし、その言葉とは裏腹にボールの球威やキレは弱くなってきたのである

第一球は内角に入るカーブだった。ボスゴドラはバットを振ったが、ボールには当たらなかった

第二球も内角に入る球だったが今度はスライダーだった。その球もバットを振ったが当たらなかった

「これで終わりだ！」

ワンリキーは力いっぱいボールを投げた

球は内角低めに入ってきている

「もらった！」

ボスゴドラは素晴らしいながらバットを思いっきり振った

すると、カキンという音が聞こえた。

打球はレフトに高く飛んでいっている。このまま行けばホームランコースである

「なんだと！」

ワンリキーはそういいながら打球の行方を追った

そのボールの飛んでいる方向にはヒノアラシがいた

だが、そのボールを取ることはどう考えても無理である

「これじゃあ取れない」

ヒノアラシはそう思ったが、ホームランエリアの手前までたどり着いた

しかし、その球をそこからとることはできない

「こうなったら。頼む！ リザードン」

ヒノアラシは手持ちのリザードンを出した

「リザードン！ かえんほうしゃであのボールを打ち落として」

ヒノアラシがそう指示するとリザードンはかえんほうしゃを放った

しかし、動いているものにあてるのは難しうかなか当たらない

「がんばるんだ、リザードン」

ヒノアラシがリザードンを後押しする

「無駄だ無駄だ。ホームランだぜ！」

ボスゴドラがベースを走りながら言った

リザードンはかえんほうしゃを連射した。そして、ついにボールに当たったのだ

「やった！」

「なに！？」

かえんほうしゃが当たったボールは一気に急降下してきた

そして、そのボールをヒノアラシはあっさりとキャッチした

「ナイスだ！ ヒノアラシ！」

サードにいたニューラが大声で言った

ヒノアラシはリザードンをボールに戻して内野に向かった

そして、最後の挨拶をした

結果は、四対一でブレイズの勝利であった

挨拶が終わったらブレイズのメンバーは全員ベンチに戻った

「やったな、ヒノアラシ」

ワニノコがヒノアラシに言った

「うん。僕たちにとっての最初の試合が勝ちだもんね」

「ああ。それに俺はホームランを打ったし、ヒノアラシはファインプレイだもんね」

「うん」

そう話しているとニューラが近寄ってきた

「今日はありがとうな」

「いいってことよ」

「数合わせだから今日だけ試合に出てもらったけど、今度足りなくなったらまたよろしくな」

「うん」

「それじゃあ、俺たちは帰るぜ」

「わかった」

「じゃあな」

ワニノコはそう言うヒノアラシと一緒にそのベンチを後にした

そして、連休明けの学校

ワニノコたちが休み時間に話しているとまたニューラがやってきた

「おい、お前ら」

「なんだ？」

ワニノコの後ろにニューラが来たためワニノコは後ろを向いた

「また人数が足りなくなったからまた頼むぜ」

「またかよ！」

「まあまあ、そう言うなって。それより、やってくれるのかやらないのか？」

「どうする？ ヒノアラシ？」

「いいんじゃない」

「いいんじゃないって……。まあ、いいか」

「じゃあ、決定な」

「ああ」

「また頼むぜ、ホームランとファインプレイ」

「できたらの話だけだな」

「そりゃそうだ。じゃあな。また、今度連絡する」

そういうとニューラはワニノコたちのところから離れていった

そして、再度野球の試合にのぞむのだった……

T
H
E

E
N
D

（後書き）

今回は野球の小説です。最初は「結構簡単にかけそうだな」とか思っていました。が、実際に書いてみるとなかなか難しかったです。試合の部分とかがなかなか表現に困りました。一応、ある小説コンテストに投稿するために書いた小説なんですが、いまのところ投稿する予定はなかったりします。あまり、表現とかがうまくないので。

ちなみに、この小説は2006年の甲子園の決勝（再試合じゃないほう）を見てかきたくなりだったので書いたものです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1742w/>

ポケモンベースボール

2011年10月9日14時57分発行